反省会への問題提出

(1960)
(7.14

○ 執筆内容および分担はこれでよろしいか。

表題 ……「人類の生態学」　編輯　今西錦司

内容 ……第1章　緒論および方法論 ……今西

第2章　前人類共同体から人類共同体への展開 ……伊谷・東・吉妻

第3章　単層同質共同体の分類・系統および編成 ……藤岡・佐々木

第4章　単層同質共同体から重層異質共同体への展開 ……岩田

第5章　重層異質共同体の分類 ……川喜田・飯島

第6章　重層異質共同体の系統 ……梅棹・谷

第7章　重層異質共同体の編成 ……上山・志水

各章毎に400字原稿用紙100枚前后。

原稿〆切 …… 11月30日

原稿の出版社渡し …… 1961年3月末日

○ まだ相談できていないこと

和崎君の分担
米山君の分担
中見出しをつくるか
小見出しの出現度をどのくらいにするか
地図・挿図・写真についての注意
文献についての注意
註記についての注意

原稿はできた分からモンキーセンターの複写機で写真にとり，これを全員に配布，註記を求め，これを一括執筆者におくり，執筆者はこれに答える。以上はCurrent Anthropology Systemだが，これをわれわれはsympodium形式で全員に公開する。

○ 九月以降の研究会のあり方について

研究会の日取り
12月以降はでき上った原稿についての討論（上記 註記についての注意参照）となるか，9月～11月間はどうするか

○ 執筆前にもう1度確認を必要とする問題点

第2章・第3章　人間共同体の多起源論と単起源論の問題

人間以前と人間以后（共に単層同質共同体）の区分法について，原案では"hunting lineを乗りこえる"というところに一線を劃するつもりであったけれど，その后vegetarianのまま（no hunting, no herding）で，前人間共同体から人間共同体へ進化した可能性（東南アジアにおいて）が考慮されるに至った。するとこの場合に前人間共同体と人間共同体とをわかつcriterionを，何に求めるべきであろうか？（飯島は生産を問題にするか，もっともprimitiveなgathering economyに生産が考えられるか？）

人間共同体のもっとも原初的な形態の問題

単細胞生物から多細胞生物へ進化した如く，はじめにfamilyがばらばらで存在したものから，のちにfamily集団としてのcommunityに進化した，という考えは今でも相当有力である。

Kyoto University

しかし、この analogy は成立しない。family 以前に community がすでに存在するからである。community の institution として、community の中に、community を解体しないで family が生じたのでなければならない。Shoshoni や Eskimo に見られる family のバラバラになった社会は、それ故 secondary adaptation を現わしたものであって、原初型を現わしたものでない。(これは重要な問題なのだが今まで discuss されずにきた。これでよいだろうか?)

farming がさきか、herding がさきか

hunting line を乗り越えた人間が hunter となるが、これは F の中でなくて O (サバンナ) において群れをなす動物を対象としたとき始めて成立する。hunter が herder に移行することは、food habit の問題として、hunter が farmer に移行するよりも可能性が多い。旧大陸の O 地域に関する限り、whead cultivation の成立は hunting & herding の支えのもとに序々に進行した (grain の処理の問題)。従ってここに成立した farming は、始めから herding and farming である。のちになって herding と farming とが symbiotic な関係をもちつつ (川表田説)、分離することはあっても state の成立以前は単層であり、city の成立以前は、異質でなくて、同質である。ブタとニワトリ (東南アジア origin) を除き、F 地域に見られる家畜はすべて borrowing による (他の家畜はすべて F proper の動物とは云い難い)。アイヌは家畜をもたない hunter だった。モンゴル人は herding and farming から farming を切って herding only に生活の道を求めたものだろうか (梅棹説)、F 地域の hunter の中には退化した farmer や進化した gathever の存在が考えられないか (単層同質社会の系譜論は充分 discuss されておらない)

斜面耕作がさきか、水田耕作がさきか

斜面耕作の方が古いということになっているが、確証はなく、理論も伴わない。gathever, pure hunter, pure herder, 森林内の斜面耕作民からは遂に持久的な state は形成されなかった。

第4章以下 state がさきか、city がさきか

両者ともに social surplus に依存してはじめて成立可能である、state のできるだけの social surplus があっても city のできない場合はいくらもある。city の方がそれだけ高い social surplus を必要としているといえる。social surplus はそこで生産される食物の生産量によって異る。rice は収穫量大なるも、投入労働量また大であるが、wheat は収穫量 rice に劣るといえども、投入労働量が少くてすむ。結局一定人口から生ずる social surplus は wheat の方が rice を常に上廻る結果となり、これが O 地域の wheat eater をして、世界における最初の civilization (その center はモチロン city にある。) を開発さすことになったのでないか。

富力導入の容易さ

また O 地域から civilization が F へ流れ込んだ場合、充分開発されない、F 地域の social surplus の低さのためにそこに根をおろし得なかったということが考えられてよい (東南アジアの場合)。また social surplus が高ければ社会、従って civilization の恢復も早いわけだが、それが低い場合には一旦荒廃すると容易に恢復しないということがある。F 地域ではこの場合に森林化が生じて更に恢復をおくらす。

この社会進化の速度という問題は系譜や系列と共に当然考えられるべきであるにもかかわらず、いままで充分に論ぜられていないのは、量よりも質でいくという安易性が支配的であることによるのでなかろうか。

O 地域が F 地域に追い抜かれる理由

以上に述べた理由で、旧世界の O 地域は人類社会の中心となり F 地域は peripheral となった。しかし F 地域の開発が次第に進むにつれて、その土地の生産性が真価をあらわし、F 地域のもつ生産の連続性と相まって、ここに social surplus の集積、従って人口の集積を招くに至り遂に人類社会における O 地域と F 地域の地位は逆転し、F 地域が中心となり、O 地域は peripheral に甘んぜざるを得なくなるのだが、これは歴史的にみて何時頃だろうか。

それと同時に旧世界に二つの中心ができる訳だが、東亜よりもヨーロッパが進むのは一つは人口の集積を許す地域の広さであり他は wheat 栽培による生産性の高さによるものということができる。結果的にみれば city のもつ weight が大きく、これが社会進化を促進した。キリスト教の果たした役目などは secondary なものでなかろうか?

中世から近世へかけてはraceの方がwheatよりも多いか

city こそは人間共同体のアルファにしてオメガである

人間共同体はその進化のはじめにおいては前人間共同体と同様に、血縁原理の上に成立していた、血縁原理による限りその発展は一種の budding であり、発展の頂点は clan であった (Iroquois Leagne は一つの限界を示す)。これが征服国家における支配層に発展する

Kyoto University

Tribe — ぞ心血縁的.

可能性はある(nomadの場合)。しかしcityはclanと無関係に、むしろclanのよってたつ血縁原理と矛盾した別個の原理の上に成立した、これを假りに市民原理という。人間共同体の発展はこれよりのちは今日に至るまで正に市民原理の拡大であり、urbanizationの一途を辿る。人間共同体の歴史はcity以前と、city以後に大別される。technologyの発達はurbanizationの発展に寄与する必要条件ではあっても十分条件ではない。stateさえcityを維持する一つの系にすぎないかもしれない。cityを押えるものが、stateを押えるのである。東京に革命がおこり、東京が革命軍の手に落ちたら、日本の革命は(外国の軍隊が入ってこぬ限り)、既に9分通り成功したものといえる。上山は共同体をprimaryとsecondaryにわかったが、これを上のようにcommunity成立に関する二つの異る原理としてとらえることができないだろうか。

stateはcommunityであるか (編成論の前提としてdiscussされてよい)

この二つの原理はテンニウスのgemeinschaftとgesellschaftに対応するところがある。例えば村落というものをとってみるとこれは必ずしも血縁原理の上に成立しているものではないにもかかわらずgemeinschaftlichである。原始社会にみられるsecret societyも血縁原理の上に成立しているわけではないが、そうかと云ってこれを市民原理によるものというわけにいかない。しかし村落やcityはcommunityであるが、secret society自身は、communityでない。communityとは地域共同体であり、communityには、かりに血縁原理がleading principleになっていても、常に必ず地縁原理が働いている。地縁原理はgemeinschaftlichなものである。cityはもともと市民原理によって成立したものであるにもかかわらず、地縁原理の発生を排除できない限りgemeinschaftlichな半面をもつstateにも地縁原理は作用している。urbanizationが進み、social mobilityがはげしくなるほどcityの地縁性は減退する。そしてcityが完全にgesellschaftlichな市民原理的なものになってもstateがこのsocial mobilityに枠をはめている限り、stateはやはり地縁原理を失わない、多分にgemeinschaftlichな地域共同体、即ちtraditionalなcommunityであり続けるであろう。

stateの編成原理

cityはcityのみで成立しない、自給自足できないということである。編成の原理は集団生活の確保にある。stateもそれが自給自足できれば問題ないが、自給自足できぬところから編成の問題を提供する。交易は共同体が生きていくために必要なstoffwechselである。industrializationはこのstoffwechselの促進である。stoffwechselの促進は結果的にみて、state内における生活水準の向上である。urbanizationがその落差を求めてcityから田舎へ及ぶ如く、先進工業国から後進諸国に及ぶのは必然であり、United Nationはstate等のtrobleを調停しつつ平和裡にcivilizationの普及へと努力するであろう。

——(以上 今西呈出)——

Kyoto University

生態学大系内容

第1巻　沼田真編　植物生態学（1）

Ⅰ	植物生態学の歴史と方法	50枚	沼田真
Ⅱ	植物共同体の構造		
1.	群落構造に関する研究の発展	10	沼田真
2.	群落構造の解析	50	沼田真
3.	植物共同体の分散構造	100	沼田真・篠崎吉郎
4.	植物共同体の類型	70	沼田真
Ⅲ	植物共同体の分類と分析		
1.	植物共同体の分類	60	鈴木時夫
2.	植物共同体の分類と分析	30	吉良竜夫
Ⅳ	サクセッションとクライマックス		
1.	サクセッション説	15	飯泉茂
2.	サクセッションの実例	70	飯泉茂
3.	サクセッションの解析		
A.	光條件とサクセッション	30	大島康行
B.	土壌條件とサクセッション	20	飯泉茂・山根一郎
C.	社会学的な解析	20	沼田真
4.	サクセッション説の現状と批判	25	飯泉茂

第2巻　吉良竜夫編　植物生態学（2）

Ⅰ	生態系と植物共同体の機能		
1.	生態系と生態系学	20	吉良竜夫
2.	生態系の基質		
A.	大気	40	黒岩澄雄・翠川文次郎
B.	水界	50	市村俊英・吉良竜夫
C.	土壌	50	吉良竜夫
3.	陸上生態系内の水の循環	40	吉良竜夫
4.	植物共同体の物質生産	90	佐伯敏郎・穂積和夫・木村允
5.	有機物の分解と物質の循環	50	斎藤紀・吉良竜夫
Ⅱ	植物共同体の分布		
1.	大分布と小分布	15	吉良竜夫
2.	地形的小分布	70	石塚和雄・岩田悦行
3.	地質的小分布		吉良竜夫
4.	大気候の分布	90	吉良竜夫
5.	植物共同体の大類型の気候分布		
6.	植物共同体の進化と古生態系	25	吉良竜夫

第3巻　森下正明編　動物生態学（1）

Ⅰ	動物生態学の歴史と方法	40	渋谷寿夫
Ⅱ	動物の生活と環境		
1.	環境の概念	10	森下正明
2.	動物と環境との関係の仕方		
A.	生理的基礎	15	桑原万寿太郎
B.	生活と環境	10	森下正明
3.	個体の生活に関係する環境要素	50	森主一
4.	個体群および種の生活と環境		
5.	共同体と環境	10	森下正明
Ⅲ	動物共同体の地域構造		
1.	動物共同体の把握の仕方	20	加藤陸奥雄・森下正明
2.	陸上の動物共同体とその分布構造		
A.	大地域共同体	50	野村健一
B.	小地域共同体	30	加藤陸奥雄・松田達郎
3.	水中の動物共同体とその分布構造		
A.	陸水の共同体	40	宮地伝三郎
B.	海洋の共同体	40	宮地伝三郎
Ⅳ	動物共同体の内部構造と機能		
1.	共同体内部の生産構造	50	北沢右三
2.	共同体内部の種間関係	100	森下正明
3.	共同体構造の時間的変化	20	森下正明
Ⅴ	動物共同体の進化	50	徳田御稔

第4巻　内田俊郎編　動物生態学（2）

Ⅰ	個体群生態学		
	―発展史・範囲・他分野との関連―	10	内田俊郎
Ⅱ	個体数の推定		
1.	抽出法・標識再捕法など一般法	30	田中亮
2.	動物群の特殊性に応じた特殊な方法	30	橘川次郎・伊藤嘉昭
Ⅲ	個体群の空間的分布		
1.	個体群の隔離と大きさ	30	川村智治郎
2.	個体群の分散	30	伊藤嘉昭
3.	個体群内の分布様式	30	河野達郎
4.	個体群密度	10	内田俊郎
Ⅳ	個体群の時間的変動		
1.	個体群の生物学的属性	30	内田俊郎・高橋史樹

Kyoto University

2.	個体群の成長型	30	内田俊郎・高橋史樹
3.	変動要因	50	内田俊郎・高橋史樹
Ⅴ	個体群の内部構造		
1.	群棲の影響と最適密度	25	内田俊郎
2.	集合の形成	30	巖　俊一
3.	なわばり制	25	森下正明
4.	超個体としての昆虫社会の構造	40	坂上昭一
5.	高等動物にみられる集合の構造	30	川村俊蔵
Ⅵ	集団遺伝学から	40	太羽　滋

6

第5巻　沼田　真・内田俊郎　編　応用生態学

Ⅰ	総　論	30	沼田　真
Ⅱ	耕地生態系	100	吉良竜夫
Ⅲ	林野生態系	50	四手井綱英
Ⅳ	草地生態系	50	飯泉　茂
Ⅴ	陸水生態系の利用	50	小野寺好之
Ⅵ	汚水の生態学	30	津田松苗
Ⅶ	海洋生態系の利用	100	宮地伝三郎
Ⅷ	有害動物の大発生とその防除		
1.	脊椎動物	50	太田嘉四夫
2.	無脊椎動物	50	内田俊郎
Ⅸ	雑草と病害の防除		
1.	雑草防除	50	沼田・荒井・笠原
2.	病害防除	30	今関六也
Ⅹ	自然保護		
1.	野生生物保護	30	橘川次郎
2.	景観保護	30	沼田　真
Ⅺ	医生態学	50	田中恒雄・粂山政子

各巻　原稿枚数　500～600枚　を原則としましたが
完成は　約2割増加し　700～800枚（第1・2巻）
となりました。

Kyoto University

第一部　オニ章　單層同質共同体　（項目案）

§1　血縁原理
　。budding　。band から clan へ　。band から tribe へ　。tribe（内）の分業
　。擬似身分制の成立

§2　アニミズムの世界
　。トーテミズム　。先祖　。シャーマン　。パースナリティー

§3　單層同質クライマックス
　。熱帯雨林気候区　。サバンナ・ステッペおよび砂漠気候区　。温帯気候区
　。亜寒帯および寒帯気候区　（これらの区分は植物生態学の吉良の章と充分連絡のあるものにする予定）

§4　クライマックスの要因
　。食料と人口　。原始的牧畜　。原始農耕　。單層同質共同体の相互関係

備考

1　以上の項目の順序と項目名とは，このまえの討論を含んで書き改めたものです。もちろん，まだ確定したわけではありませんが，一応この線で執筆にとりかかりたいと思います。原稿の出来工合から，全体の構成を修整するというフィードバックは，おいおい行うことにします。

2　以上の項目を通して，この章の主眼点はつぎのように見られています。
a　高等脊椎類からハンティングラインをこえたところはどんな按子か？　その按子は血縁原理を基礎として眺めれば，理解できるであろう。

b　パースナリティーはまだ充分発達していないであろう。もっとも高級な段階として集団のシンボルを持つというトーテミズム段階を考える。人間の精神は，まだ clan や tribe の外へまでは同類(?)意識をひろげず，spirit と交流する。（オ三章では同類(?)意識は地域国家内へひろがり，精神は神をあがめる。高度の段階では，神と交流するのは専門宗教家だけとなる）。

c　單層同質社会は，以後の高次の社会に比べれば，いちじるしく生態系の一員としての性格をもっているにちがいない。したがってその安定形は，それが属する生態系の類型によって種々の特徴を示すであろう。§3 ではそれらのちがいをえがく。

d　§3 によって示される種々のちがいにもかかわらず，これらの共同体は，いづれも余剰を高次の段階へと組織化しない，という点で共通性をもつ。§4 では，余剰を生ぜしめない要因，余剰を蓄積せしめない要因に論点をおく。さらに，余剰が生じうるとすれば，そこには原始牧畜と原始農耕が存在するであろうと考え，これらを，余剰を生じない段階においてのみ考察する。（オ三章ではこれらが余剰を生ずるという点で考察されることがのぞまれる。）

Kyoto University